

僕も

私も

物理に化学と、日本の4氏の受賞ラッシュに
わいた今年のノーベル賞。子どもの理科離れが
叫ばれているだけに、今が科学に興味を持って
もらうチャンスだ。地道に子ども向けの講座を
開いてきた教育機関は、関心の高まりに期待し
ている。
(山田菜の花)

未来はノーベル科学者

身近なものを使った工作を通じて、子どもたちは音が鳴る理由やゴムの弾性を学んだ。18日、福岡市中央区の市立少年科学文化会館



福岡市中央区の市立少年科学文化会館で18日、幼児から中学生までが科学を体験するイベントがあった。02年から月1回開き、この日は300人の親子連れが参加した。
企画に加わった元理科教師の下村弘一さん(70)は、フィルムケースに穴を開けた笛の作り方を教えた。湯川秀樹さんのノーベル物理学賞受賞(49年)がきっかけで科学

にぎわう子ども向け講座

各教育機関の講座の問い合わせ先は次の通り。
福岡市立少年科学文化会館 (092・771・8861) ▽福岡教育大 (0940・35・1480) ▽佐賀県立宇宙科学館 (0954・20・1666)

「理科って楽しいよ」

に興味を持ち、教諭を志した。「幼心にも科学って面白そうだと思った。4人の受賞で私のように関心を持つ子が出てくるのではないかと語る。

理科離れを止めようと科学講座を開いてきたのは福岡教育大(福岡県宗像市)だ。25日午前10時から、中小高校生を対象に14のテーマ別に科学とモノづくりの楽しさを学ぶ講座を開く。

パセリの蛍光物質を取り出す実験もする。光るオワンクラゲを研究した下村脩さんが化学賞を受けたばかり。大学の関係者は「光る物質を取り上げるのは偶然だが、子どもたちが集まってくれるかも」と期待する。

佐賀県武雄市の県立宇宙科学館は企画を急ぎ、練り直している。12月に、素粒子「ニュートリノ」をテーマに、子どもにもわかりやすい展示を予定していた。02年にノーベル物理学賞を受けた小柴昌俊

さんの研究だが、今年の物理学賞を受けた3氏の素粒子物理研究も紹介しようと、準備にかかっている。

日本の子どもの理科離れは深刻だ。経済協力開発機構(OECD)が3年ごとに15歳を対象に実施している学習到達度調査(PISA)をみると、日本の科学的リテラシー(応用力)は00、03年の2位から06年は6位に下がった。科学への関心も低く、例えば「科学についての本を読むことが好き」は06年は36%で、57カ国・地域で最下位だった。

定期的に子ども向け講座を開いている九州大の高原淳教授(高分子化学)は「少しでも若い時期に科学に関心を持つことが大切だ」と強調する。今年のノーベル賞4氏は20〜30代の独創的な研究が受賞につながった。「高校生でも遅いくらいだ。優秀な若手科学者を育てることが私たちの最大の使命。だからこそ、最先端の研究を子どもたちに伝える講座を開くんです」